



はじめに

左甚五郎については、この連載の第3回目で取り上げ、水戸黄門のような庶民が求めた理想のヒーローであり、虚構の存在だと述べました。ところが案に反して、四国の高松には左甚五郎の子孫を名のる左光拳なる人物がいたのです。

左氏は明治40年(1907)生まれの彫刻家で、昭和26年(1951)には甚五郎没後300年祭を挙行。その様子はNHKで全国放送されたといいますが、さらに昭和28年には左甚五郎の「実説」である『名匠左小刀』を刊行しました。これは550頁を超える大作であり、その他にも甚五郎の存在を証明すべく種々の論考を発表しています。それでは左氏の語る実説左甚五郎『名匠左小刀』を要約でご紹介しましょう。ちなみに、昭和34年(1959)に刊行された河出書房新社の『日本歴史大辞典』では、この左氏の著書をもとに、「左甚五郎」の項目が執筆されました。

く程の際も見えない。「それつ、各々一齊にかかられつー。」あわや真二つと思つた瞬間、甚五郎は弾丸のごとく相手の手許に飛び込んで脾胃をついた。そのかえす撃で、横よりついてかかる無頼漢の喉を掻き切つたので声もたてずに打ち倒れた。…こうして甚五郎は、なんと両手に持ったノミを武器に、大刀を持つ数人を返り討ちにしてしまうのです。

中井遠江守

この他、作中には甚五郎の敵役として、幕府の棟梁の中井遠江守正清なる人物が登場します。おそらくこれは実在した大工頭の中井大和守正清のことだと思ひますが、実説だと言うのになぜ「大和守」が「遠江守」になつてしまったのか。また、作中の遠江守は幕府の棟梁というよりも、博徒の親分のように、ほとんど股旅物の悪役です。

それにしても、先に紹介した『日本歴史大辞典』の執筆者は、これを読んで何の疑問ももたなかったのでしょうか。私はどこまで本気だったのかと、首をひねつてしまったのですが、作中では「閑話休題」として事実であることを強調するエピソードをたびたび挟み、さらに後年に出版したほぼ同じ内容の『名工左甚五郎の一生』では、左氏に異議をとなえた建築史家に真っ向から反論するなど、大まじめだったようです。

建築史家・伊藤ていじ

さて、その左氏に異議を唱えた建築史家とは、民家研究などで有名な伊藤

大活劇！左甚五郎



『名匠左小刀』の要約

左甚五郎は、文禄3年(1594)12月26日に足利家の重臣の子として播州明石に生まれた。父は幼い甚五郎を残して亡くなったため、飛騨高山の城下に住む叔父の河合忠左衛門に預けられ、築城学や剣術を学んだ。

ある日、甚五郎が飛騨国分寺の境内で雪の仁王像を作っていると、禁裏御用大工の遊左与平次の目にとまった。甚五郎は弟子となつて京に上り、9年の後に大伽藍の建立にも携わる若棟梁となり、畿内第一と大した評判になった。また、竹でつくつた花開く水仙の彫刻によつて、天皇から「天下」の称号を許された。

その後、甚五郎は、江戸城設計並びに大改築の宿命を受けたが、棟梁の座を奪われた中井遠江守の子分に襲われ、これを返り討ちにした。

大改築が完成すると、地下の抜け道をはじめ、江戸城の秘密を知る甚五郎を暗殺しようと、旗本たちが襲つてきたが、これも返り討ちにした。

ていじ氏なのですが、下記のような不審点を挙げています。

- ① 生駒家の二つの史料に「甚五郎」の名があることが、左甚五郎実在の最大の根拠としているが、その「甚五郎」が左甚五郎という証拠はない。(詳細は後述します)
② 3代にわたつて甚五郎の名が受け継がれたのに、棟札などにその名が現れたことがない。
③ 左家に伝わるという系図は、3代目と4代目の間に64年の開きがあつて不自然である。

飛騨郷土史家・菱村正文

伊藤氏の他に、飛騨郷土史家の菱村正文氏は、甚五郎の叔父の河合忠左衛門や、師匠である遊左与平次が飛騨にいた記録がない、などと飛騨史に関連のある5つの重大な疑問点を挙げた後、「この外にも左論考の中に幾つか不審点がある。しかしそれらは飛騨史の上からはどうでもよいことなので割愛する」と言い捨てています。

生駒家分限帳※3と生駒家士分限帳

さて、伊藤氏の挙げた不審点①で触れましたが、左氏は寛永11年の「生駒家分限帳」と寛永16年の「生駒家士分限帳」の二つの史料に「甚五郎」の名があることについて、「甚五郎が大工頭として7年間を仕えた左甚五郎在世中の記録であり、在藩中の生きた藩の公文書の記録として、甚五郎が実在の大工頭である事とその年代を正確に立証す

老中土井利勝は旗本を討つた甚五郎を捨て置けず、死んだものとして娘婿の生駒讃岐守の国元である讃岐高松へ3年間亡命させることにした。「嬉遊笑覧」などに出る左甚五郎の年譜は、この江戸亡命の日、寛永11年(1634)4月26日を死去の日としている。

この後、寛永16年春に、生駒藩が改易になったため、甚五郎は京都に引き上げることとなり、寛永19年2月に松平頼重が讃岐高松に移封されるに及んで、再び客分棟梁として迎えられるに慶安4年(1651)12月29日に58歳にて波乱の一生を閉じた。ということになっています。そして、左甚五郎の名は讃岐で3代まで世襲され、左光拳氏は7代目ということになるそうです。

鑿の二刀流

さて、上記のように「名匠左小刀」には、甚五郎が度重なる刺客を返り討ちにしたという場面がありますので、抜き出してみましよう。それは、甚五郎が

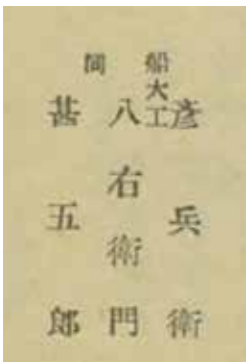
る記録として、これ以上完璧な証明はない」と、まさに最重要の典拠史料だと述べているのです。

それでは、この二つの史料を見てみましょう。左氏は「考証左甚考」の中で、それぞれが採録されている書名のみならず、甚五郎の名があるページ数まで教えてくれています。それによると寛永11年の方は『西讃府志』の1046P、寛永16年は『真書讃岐生駒記』の127P。これらはインターネットの「国会図書館デジタルコレクション」で気軽に見ることが出来ます。

寛永11年？ 船大工？

そして、これらを見ると確かに数人の「大工頭」の中に「甚五郎」の名があります。しかし、これだけでは伊藤ていじ氏の言うように、この「甚五郎」が左甚五郎か判るはずがありません。それに加え、「寛永11年」の方は作成年不明であることがわかりました。

なぜなら最後に「末尾破損シテ奥書無ケレバ何レノ年何レノ人ノモノセシト云フコトハ今定カナラネド」とあり、おそらく寛永10年前後だろうと推測しています。こうした注があるにもかかわらず、なぜか左氏はこの史料が寛永11年のものだと言いつつ切っています。



左氏が寛永11年のものだという「生駒家分限帳」より。船大工・八右衛門のとなり、同(船大工)甚五郎とある

駕籠に揺られての帰り道のこと。突然、暗闇から怪しい人影がバラバラと飛び出してきました。「何故、この甚五郎の命を…」

「江戸城の完成を見た今日、その設計棟梁の甚五郎、この世に在るは幕府の不為じゃ」

甚五郎はいつのまにか両手に例の西陣の名刀匠理忠明寿の作つた大小の鑿を握り…富田流の剣法、鵜の毛で突



「名工左甚五郎の一生」の挿絵 刺客の脾胃を弾丸のように突いている左甚五郎 左光拳氏画(「名工左甚五郎の一生」より転載)

しかし、それよりも問題なのは、甚五郎は「船大工」だと記されていることです。堂宮大工や彫物大工として天下の称号を得たはずの甚五郎が、亡命したとはいえ「船大工」と記された理由は何なのか。それについて、左氏は一切触れていません。

おわりに

察するに左氏にとって、左甚五郎の子孫であるという家伝は何よりの誇りであり、まぎれもない史実だったのでしよう。それゆえ、生駒家の二つの史料に「甚五郎」の名を見たとき、犯しがたい証拠として妄信したのではないのでしょうか。

まあ、そこまではわからなくもないのですが、なぜ現実離れた「実説」まで作成してしまったのか。私は今回の『名匠左小刀』を読んでいて、ある空手家の物語を思い浮かべました。彼の武勇伝はマンガとして連載され、多くの少年たちを熱狂させました。作中では「名匠左小刀」と同じく、たびたび事実であることが強調されていましたが、後年になってほとんどがフィクションだと関係者が明らかにしています。しかし、真偽は別として、この漫画によつて、その空手家の流派は広く知られることとなりました。前回ご紹介した山口裕造氏の岩永三五郎の一代記もそうでしたが、こうした「実説」は昭和時代のある種のPR戦略だったのではないかと。まあ、現在のようにならぬ誤りでもSNSで炎上してしまう世の中ではなかなか難しいのでしよう。

(文：江口知秀)

※1 禁裏:天皇の住居 ※2 改易:所領や役職を取り上げること ※3 分限帳:大名が作成した家臣団の名簿